様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月２４日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～ 2010
課題番号：２０５２０２６２
研究課題名（和文）ゴフマン理論との協奏性から見たジェイムズ、オースティン、ホーソン
研究課題名（英文）Performing the Everyday in the Works of Henry James, Jane Austen, and Nathaniel Hawthorne

研究代表者
若菜　マヤ（WAKANA　MAYA　論文執筆名：WAKANA　HIGASHI　MAYA）
立命館大学・国際関係学部・教授
研究者番号：８０２０１１４３

研究成果の概要（和文）：
当該研究は英国の学術出版社より出版された単著、*Performing the Everyday in Henry James's Late Novels*（Ashgate 2009）の研究成果を発展・進化させたものである。現実の虚構性をリアルに描いた作家として、ジェイムズに加え、オースティン及びウォートンを取り上げ、日常は「表現された秩序」であると提唱した米国ミクロ社会学者Ｅ．ゴッフマンの理論を文学作品に重ねて詳細に分析を行った。そして、「親密性」をキー・ワードに次なる単著の出版に向けて大きな一歩を踏み出した。

研究成果の概要（英文）：
I contend that the fiction of Henry James—among other authors such as Jane Austen and Edith Wharton—reflect life's fictional, constructed quality. Continuing to employ the theories of twentieth century microsociologist Erving Goffman as a tool of literary analysis, I expand and move beyond the claims I made in my monograph, *Performing the Everyday in Henry James's Late Novels* (Ashgate 2009), to focus on understanding the phenomena of "intimacy" in both the conventional and unconventional senses of the word.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：英米文学、ミクロ社会学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：ヘンリー・ジェイムズ、ジェーン・オースティン、イーデス・ウォートン、ナサニエル・ホーソン、ミクロ社会学、「顔」、対面行動、「表舞台・裏舞台」

１．研究開始当初の背景

欧米の文学作品研究の大きなうねりとして、ニュー・ヒストリシズムやマクロな社会学的観点から行われてきたものがある。文化史的研究を始めとして、民族、階級、出版事情、衣装、契約思想、食物、ジェンダー問題、そしてセクシュアリティーに至るまで様々な角度から研究が進められてきた。例えば、ヘンリー・ジェイムズの作品は当時の時代や文化を反映し、又これらに対してのジェイムズの立場が作品を通じて表明されている、と言う訳だ。一方で心理学的なアプローチも一時盛んであった。そのような状況下で、当該

研究者はこれまでの研究にミクロ社会学的な視点が欠けていると考えた。ミクロ社会学的なアプローチは社会心理学的なアプローチと重なるが、前者は対面行動の構造に焦点をあて、後者はまさしく個々人の心理状態に光をあてている。

つまり、マクロな視点とは異なるミクロ社会学的・社会心理学的視点を文学作品研究に導入するのが当該研究の最大の特徴である。マクロな次元で効力を発揮する社会規範以外にミクロな、つまり対面行動を行う次元での社会規範がこれとは別に存在することはあまり明確に認識されていないが、このミクロな次元の社会規範は時としてよりマクロな次元で有効な社会規範を補強し、あるいはこれとぶつかり、さらにはひっくり返す。

換言すると、日常は刻一刻と演者により構築される虚構のもので、これを正確に文学作品に映すジェイムズの作品は、マクロとミクロ双方の規範のせめぎ合いの中で、混乱し、翻弄される社会化された人間の姿を描く。ジェイムズの作品群には現代社会の根底にある礼儀正しさ（civility）が持つ、見えない疎外、つまり、規範にかなった振る舞い、態度、反応の仕方における人間のジレンマという普遍的かつ今日的（21 世紀的）テーマが潜んでいるのではないかと当該研究者は考えた。

そして、当該研究者はミクロ社会学・社会心理学理論が文学作品に描かれる社会化された人間が身に付ける礼儀の作用を的確に分析する道具として最適であることに着目し、六年ほどかけてジェイムズの作品をミクロ社会学的に分析する研究を行い、英米の学術出版社からの出版の為の努力を行ってきた。その結果、何度かの審査過程を経て、2008 年 7 月に Ashgate 出版社と出版契約を結び、2009 年秋に単著 *Performing the Everyday in Henry James's Late Novel*（Ashgate 社）が出版された。この中で当該研究者はミクロ社会学者的文学者としてのジェイムズを提唱した。

当該研究のように、「恩」や厚意の貸し借り勘定などの不文律的な次元にまで踏み込み、ミクロ社会学的な意味での「顔」の問題を作品分析の中心に据えたものはなかった。今回はこの研究をさらに拡大・発展させた形で、ジェイムズが高く評価したジェーン・オースティン、イーデス・ウォートン、或いはナサニエル・ホーソンの作品に同様の分析を試み、ジェイムズがこの作家たちの作品の中に何を見ていたか大胆に推理しながら当該研究者の研究手法の可能性をさらに広げるべく研究に着手した。

２．研究の目的

ジェイムズが高く評価した作家たちにオースティン、ウォートン、ホーソンなどがいるがこれら作家の作中人物たちは、ジェイムズの作品の作中人物同様、ヨーロッパ人であれアメリカ人であれ、その場の空気を読み、その場の規範に従って行動するよう社会化されている。彼らは「現実」の日常生活を営む我々同様、日常生活を支配する諸規範に従ってその「場面」を演じ切ろうとする演者である。このような人間観もしくは社会感覚に根ざした分析手法は、「日常生活は劇場である」、或いは「日常生活は表現された秩序である」と説いた異色の社会心理学者アーヴィン・ゴフマンの理論と通低する側面があることに着目し、理論的協奏性という視点からゴフマンの社会理論などをこれら作家の作品分析にも応用した。本研究では、オースティンの『高慢と偏見』、ウォートンの『イーサン・フロム』、そしてホーソーンの『緋文字』を「表舞台」、「裏舞台」、「スティグマ」、「顔」、

「マクロ及びミクロの次元の社会規範のせめぎ合い」をキーワードにダイナミックに分析することを目標とした。これらの作家たちはそれぞれの作風を維持しつつ、現代社会における 社会規範にかなった振る舞いを推進する際生じる大いなるジレンマを浮き彫りにし、その構造を解明しようとしていたのではないか。当該研究者はこの仮説の妥当性の検証を目指した。

３．研究の方法

当該研究者は、社会心理学理論や文化社会史研究などの助けを借りながらも、あくまでも作品を丁寧に紐解き、具体的な日々の営みの中に潜む束縛の要因を洗い出す作業を手がけている。文学批評の先行研究についても主たるものについては可能な限りすべて目を通し、ミクロ社会学的分析に資するものをうまく論文を執筆する際組み込んで、順次論じて行った。最初はミクロ社会学者アーヴィン・ゴフマンの理論を専ら使っていたが、社会心理学やコミュニケーション・スタディーズ、ひいては最新の哲学理論にも手をのばし、なるべく垣根を取っ払った形で自由に論じるよう心掛けた。

文学作品の作中人物たちの「礼儀正しさ」は、挨拶をする・しないという次元のものに加えて、半ば習慣化した反射的ともいえる次元のものにも及ぶが、例えば誰かの「顔」がつぶされ、気まずい空気が流れると、対面行動を可能にしている暗黙の了解事項や前提がすべて崩される。そこで対面儀式の参加者はその場を繕うために自らの直接的な利益に反する行動を厭わない。何かの「ふり」をし、後になって考えると説明のつかない言動に出てしまうことも度々である。そのような振る舞いが社会的に要請されているからである、という具合に、それぞれの作品とミクロ社会学理論を重ね、作品分析を行う。

夏の一カ月ほど集中的にヴァージニア州立大学の図書館で資料収集、論文執筆、そして研究者との懇談を重ねて研究を進める一方で、国際学会でも報告申請書を該当する内容のパネルがある時は申請書を作成、送付、審査に付し、発表の機会を得る努力を行った。

４．研究成果

１）研究の遅延（出版関連作業の為）

当該研究者の単著、*Performing the Everyday in Henry James's Late Novels* (Ashgate, 2009) の出版に関連する作業と当該研究の研究期間（2008 年～2010 年）とが少し重なり、前者の作業に思いの他時間をとられる事態が生じた。幸い、その遅れを取り戻すべき努力を重ねた結果、ジェイムズの『デイジー・ミラー』論、『アスパーンの手紙』論、ウォートンの『イーサン・フロム』論及び『無垢の時代』論を概ねまとめることができた。

２）次なる単著のテーマ確定

さらに重要なことに、次に出版を目指している単著の大きな構想がまとまりつつある。ミクロ社会学的な分析を行うという研究手法で「読み」を行うのはそれとして、単著を出版する際、これとは別のより具体的なテーマ設定が必要となる。そこで、これら作家を束ねるテーマとして intimacy（「親密さ」）というものを扱おうという思いが強まった。2008 年、シカゴ大学出版から出版された Leo Bersani と Adam Phillips 著の *Intimacies* が 2010 年にペーパーバック版で再度出版されるなど、「親密さ」については数多くの書物が出版されているが、ミクロ社会学的な意味でいう「顔」の問題を中心に据えたものは未だ出ていない。次なる研究では人と人が「親

しい」(intimate な)関係になるメカニズム、あるいは必ずしも「理想的な」親しい関係でなくとも何らかの近しい関係を築く人間の営みをミクロ社会学で言う「顔」の問題を中心に据え、文学作品を紐解く中で明らかにしていきたい。

３）ミクロ社会学的文学作品の分析の試み、文学的ミクロ社会学の試み

当該研究者の研究は文学作品が我々の日常生活の虚構性をこれまで考えられていた以上に正確に反映しているとする理解に基づく研究である。換言すれば、当該研究者の研究は文学の作品研究であると同時に文学作品を通して見る人間関係研究となりそうな気配だ。

４）垣根を取り払った研究手法の確立

ゴッフマンの諸理論にとどまらず、昨今、注目されている relationship studies（人間関係研究）の研究成果の一部を文学作品の分析作業に使った結果、予想をはるかに超えた非常に立体的、かつ斬新な研究成果が出ている。文学、心理学、社会心理学、文化研究、哲学と細分化されたそれぞれの研究領域当で類似した興味関心から行われる研究は少なくない。折角なので、文学の領域にとどまることなく、なるべく先入観を取り除き、これまでそれぞれの研究領域で達成されてきた成果を生かすためにも、垣根を取り払った形で研究を進めることを追及している。

５）海外で研究を行うためのノウ・ハウの蓄積

研究内容とは直接関係ないが、当該研究者にとってこの間の非常に大きな成果は海外で学会発表を行うための手順と基準、あるいは出版を進めて行くための手順、基準、および心構えがかなり分かってきたことである。

研究を行う際、限られた時間とエネルギーしかないという問題を克服すべき、過去 10 年程、毎年夏に一か月、春に数週間集中的に米国ヴァージニア州立大学の図書館に赴き、そこにこもって集中的に資料収集及び論文そのものの執筆を荒削りながらも行ってきた。研究書を読んでいる最中に芋づる式に他の研究書（すべて洋書）をすぐに読みたい、という状況が連続的に起こることが多く、このやり方でないととても今日の研究成果は上げられなかったと確信している。

ヴァージニア州立大学に赴いて研究を進めてきたもう一つの非常に重要な成果は現地の研究者や図書館関係者、あるいは大学院生との交流である。

国内では海外で学会報告を行う手順や学会申請書の書き方、審査基準など誰も教えてくれないし、知っている人間もそう多くないと考えられる。これらは少しずつ現地で色々な話を聞く中で分かってきた。場数を踏むことで学会発表に関連する作業に慣れもした。やってみればできることばかりだが、その第一歩は背中を押してくれる人間がいないとなかなかできないというのが本当のところであろう。

海外の学術研究社からの出版についても同様で、自らアプローチするなどして様々な研究者たちと親しくなり、出版に関わることで彼らの助言や励ましを得ることができた。英米の出版事情は極めて厳しく、殆どコピー・エディットが必要でないと思ってもらえるような原稿しかそもそも取り上げてさえくれない、というようなことも知らないと如何に研究が優れていてもなかなか前に進めない。原稿を送付してもいいという出版社側の許可が出た後も場合によっては複数回審査があるなど、最終的に研究書という形にな

るまでの一連の作業及び対応は、研究書そのものを執筆することと同じ位、あるいはそれ以上に大変な側面があったということを敢えて申し述べたい。

６）具体的到達地点

最後になったが、次なる出版に向けて書きためられた原稿以外に、先だって出版された単著 *Performing the Everyday in Henry James's Late Novels* (Ashgate 2009) に関する書評が 2010 年 4 月 16 日号の *Times Literary Supplement* に掲載された。これは概ね好評で、さらに、2010 年度の海外での学会報告の申請も次々と(3 件)審査に通った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 3 件）

①Maya Higashi Wakana
A Microsociological Analysis of Henry James's "Paste" (1899). Scheduled to present at the Fifth International Conference of the Henry James Society, "Transforming Henry James." John Cabot University, Rome. July 7－10, 2011.

②Maya Higashi Wakana
"Fashioning the Self in Wharton's *The Age of Innocence*." Scheduled to present at the 42nd Northeast Modern Language Association (NEMLA). New Brunswick, New Jersey. April 7－10, 2011.

③Maya Higashi Wakana
"Performing the Domestic Social Order in Henry James's *The Golden Bowl*." 2009 South Atlantic Modern Language Association (SAMLA). Atlanta, Georgia. November 6－8, 2009.

〔図書〕（計 2 件）

①[単著] Maya Higashi Wakana
Performing the Everyday in Henry James's Late Novels (Ashgate Publishing, 2009)
※書評が *TLS* (*Times Literary Supplement*) の 2010 年 4 月 16 日号に掲載。

②[分担執筆] Maya Higashi Wakana
"'Obsessed' with James: Professionalism vs. Amateurism in 'The Real Thing.'" *Tracing Henry James*, eds. Greg Zacharias and Melanie Ross. Cambridge Scholars Press. December, 2008. 64-77.

６．研究組織

(1)研究代表者

若菜　マヤ（WAKANA　MAYA
論文執筆名：WAKANA　HIGASHI　MAYA）
立命館大学・国際関係学部・教授
研究者番号：80201143